
いつか、きっと

智明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか、きっと

【Nコード】

N3406C

【作者名】

智明

【あらすじ】

「私」は「彼」が好きだ。彼には好きな人がいることを知っていても。一緒の帰り道、電車の中でありふれたやり取り。日常に隠れている切なさを表現しました。

私の好きな人には付き合っている人がいる。

薬指の指輪がいつもそれを私に教えてくれる。

私の好きな人は優しい人だ。一緒にいると誰だって彼のことを好きになる。

やめとけば、良かった。彼を好きになるのは。

彼は自分の彼女を酷く大切にしていたし、私はその彼の想いを聞くのが好きだった。

デート話、普段の何気ない会話、二人の記念日、今までの思い出など。

胸が痛まないはずはなかったけれど、彼が好きだったから、彼を知りたいと思ったから、

私はそれを聞いてしまう。

そして何より、

いつもより少し声が大きくなること、笑顔になること。

きつと彼自身が知らない彼の変化を見るのも大好きだった。

笑って、頷いて、笑って。私がする事といえはそれだけだけれど、それでも私は彼の良き「友達」でいるためにはそれが一番の最善策だと思う。

今の私にとって一番の大切なことは、

彼が私に振り向くことを望んではいけない事と、
傍にいれる理由を失ってはいけない事だ。

「始業式かと思ってたらもうテストかよ」

「やばいんじゃないの？授業寝てばかりで」

「自分もだろ？」

「私は大丈夫だもん」

がたごと体が揺れる。さっきまでの暑さがこの中では違う世界に思える。

私は電車に乗っていた。隣には彼がいる。

私と彼の下車駅は同じ。駅からの方向は反対だ。

目的の駅まで急行で十六分、普通で三十五分。

つまり私たちが一緒にいられる時間でもある。

いつもより彼が近かった。でも、私は何も感じない。今の私は彼の「友達」だから。

「どうせ、勉強しないんでしょ？」

「良く分かってるじゃん」

彼はにっこり笑う。大好きな笑顔。その笑顔を見られるなら、

私は何も望まない。それで十分。

「これが終われば夏休みだし。あー早く終わらないかな」

「予定は補習とか？」

「……笑えないな」

いや、違う。何もかも望んでる。欲張りだけれど、

隣で笑っているのを見てるだけじゃ、もう物足りない。

がたん、と電車がゆれる。いつもと同じ風景が窓の外で流れていく。

隣には彼。電車のスピードが少し速く感じる。何故かは分からない。

冷房が体に効いていく。最初は心地よかったその冷たさもだんだん寒さに変わっていった。

「・・・寒い」

「え？」

「いや、ちょっとクーラー寒いかなって」

「そうだな、・・・ほら」

彼が自分の上着を脱いで、私に渡した。それが当然の行為のように。

彼は、馬鹿みたいに、優しいから。

「・・・いいよ、あと少しだし」

「いいから。寒いんだろ？」

「……ありがとう」

彼の上着を羽織る。冷たかった空気が、優しくなった。

少し大きい。当たり前だけど。

彼のほうを少しだけ見た。いつもと同じ横顔。私は心の中で問い掛けてみた。

―彼女にも、同じようなこと、するの？

馬鹿みたいな質問だって分かってる。だから口にしない。でも聞いてみたかった。

彼は優しい。でもその優しさが、一番に注がれるのは、私じゃない。電車の線路が、どこまでもどこまでも続けばいいのに、本気でそう思った。

少し大きい袖をぎゅっと掴む。

それだけじゃ世界は変わらないのに。

がたん、きーっと、音がした。電車が止まった。

目的地に到着。いつもと同じ所要時間で。

「じゃ、またな」

「うん・・・、上着ありがとう」

「ああ、どういたしまして」

「じゃ、ばいばい」

私は手を振って、彼から早く離れた。

彼も手を振り返すのが視界の隅に映った。でも振り向かない。

だってご丁寧に、私が見えなくなるまで彼は立っているから。

なんで、彼はあんなに優しいんだろう。

誰に対しても優しいんだろう。

―何で、あんな人好きになっちゃったんだろう？

駅からだと、凄い暑さが襲ってきた。

さっきまでの冷房は瞬間的に体から消えていった。

じりじりと暑さが体に侵食していくのが分かる。

濃いコンクリートの匂いが鼻を掠める。家までの道のりが遠く感じた。

平坦な道のりが続く。少し退屈なほど。

まるで、私の生活みたいに。

明日は、今日の延長。だから、何も変わらない。

私は彼がきつと明日も好きだろう。彼はきつと明日も優しいだろう。

そして、彼は彼女のことをきつと明日も好きだろう。

沸騰しきったコンクリートの匂いを吸い込む。相変わらず、暑い。

― 変わっちゃ、いけない。

彼の世界に存在する私は友達という色で塗られている。

その色を失う事は、世界で一番怖いこと。

いつか、きっと。そう思ってみたい。

けれど、それはない事なんだと自分が一番わかっている。

家まで、後もう少し。私は歩調を速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406c/>

いつか、きっと

2010年10月9日03時19分発行